目には見えないモノ、耳には聞こえないコトに、私たちの感覚を大きく開いていくこと──自分の体（ボディ）を出発点に考えることは、その体を取り巻く過去と未来の時間と空間を、もう一つの大きな体（ボディ）として感じることです。

名取の文化を紐解きながら、公共のスペースとの新しい出会いを探る、この「お茶っこの舞」では、名取の過去・現在・未来を、ボディ・ミーティングという形で立ち上げます。大漁唄込み踊保存会の皆さんによって、かつての港町の雰囲気が甦ると同時に、貞山堀を境にした閖上の情景が語られていきます。閖上大漁唄込み踊を鑑賞し一緒に学ぶことで、甦った過去の時間を私たちの現在の時間に重ねていきます。それと共に、名取にまつわる唄から日々新しく振付けるダンスを、皆で一緒に作っていきます。ここには、ずっと変わらない時間と、常に変わり続ける時間が、共存しているのです。

加えてわたしたちは、あやとりの手法によって、体（ボディ）のイメージを空間に広げていきます。あやとりは、お茶の間で行うこどもたちの手遊びとして知られますが、それを体全体で行うとき、更なる想像力を私たちにもたらしてくれます。あやとりの糸が交差している形は、何か意味のあるものに見えてしまう不思議さがあり、それは、あやとりが人間に及ぼすイメージを喚起する力にあると言われています。「川」、「橋」、「山」そして「網」といったイメージがもつれる紐の中に現れ、それが体の動きとともに移り変わっていきます。また、紐が繋いでいく体と体との結びつきを、紐の緊張感を通して感じていきます。そして、そのような体と体とが出会った痕跡を、紐が作る模様として印付けることで、その人と人との関係を名取の文化会館の中に位置づけ、その空間の、その場の歴史を紡いでいくのです。

そして私たちは、これからの名取を探す旅を、更に新しいことばを生み出すディスカッションへと続けていきます。自分の体（ボディ）によって、周りの人々の体（ボディ）との結びつきを感じ、そして、その結びつきを名取の文化会館という大きな空間（ボディ）に繋げて、新しい地図をつくっていくのです。その出会いの中で、体のイメージから新しいことばへ、そしてことばから体の新しいイメージへと、私たちの感じ方を大きく開いていくことは出来ないでしょうか。公共の問題を他人事ではないと思うこと、これからのニューコモンを考えていくことは、過去・現在・未来にある人や空間を、自分の大きな体として感じていく、その想像力の更なる広がりから、始まるのかもしれません。